

1995 年からの飛騨市内での民俗誌調査・実験考古学の展開

山田昌久（東京都立大学）

はじめに

私が初めて旧宮川村を訪れたのは 1993 年のことであった。富山へ続く国道の整備が始まり、それに伴う遺跡の発掘調査が進んでいて、西忍地区の宮の前遺跡の発掘調査では、湿地部から遺跡に残りにくい植物質の遺物が発掘されていた。発掘を担当していた林直樹氏に連絡を取って資料見学を行ったのだ。その遺物の中に、後期旧石器時代の地層から発見されたものがあり、「木製の槍先なのではないか？」とのうわさが広まっていたため、それを見たいと考えたからであった。

その槍先形の遺物は、針葉樹の分枝部＝枝の付け根の部分(節の部分)で、人工的に成形したものではなかったが、削られたと考えられなくもない箇所があった。私は、最終的に発掘調査報告書で出土木製品の項を、分担執筆することになった。縄文時代の建築部材などを報告したが、例の遺物は旧石器時代の加工痕とは断定できず、人工品でないだろうと記述した。

東京都立大学に勤めた後に、報告書の執筆のために数回旧宮川村をおとずれたのであるが、その際に飛騨の山峡地帯に残されていた村人たちの生活や祭り（どぶろく祭り）、そして「積雪地帯の生活用具」が収集されて「国指定の有形民俗文化財」になっていた道具類に接したことで、30 年を越えて現在に至る「飛騨の生活誌調査」を始めることになった。

東京都立大学の実習として毎年夏に 10 日間の調査を行い、季節ごとの生活ぶりをお聞きするために、春秋冬期にも調査に赴いた。毎年、調査成果を報告書に纏め、研究機関にも配布したが、調査に関わっていただいた各集落の方々にもお渡しした。毎年訪れる私たちを、村の集會に誘っていただいたり、祭りに招いていただいたり、宴席を催していただいたりした、飛騨市各地の多くの方々のお顔は、今も脳裏に浮かぶ。日曜日に古川にパチンコに行こうと誘ってくれた種蔵集落の方は、今でも忘れられない。

私たちの活動の拠点は、「国指定有形民俗文化財」に指定された民具類を収蔵展示していた民具館に、新しく遺跡資料を展示する建物を増設して改名された「飛騨みやがわ考古民俗館」であった。調査には東大・京大・筑波大・新潟大・岡山大などの国立大学の大学院生・学部生や、早稲田大・慶應義塾大・明治大・國學院大・法政大・立命館大・奈良大などの大学院生学部生が参加して、多い時には 25 人の調査団が宮川村内で合宿する規模に膨れ上がった。参加した大学院生たちの中には、京都大学・北海道大学・岩手大学・東京都立大学・国学院大学などの教員になっている方々や、文化庁・奈良国立文化財研究所・元興寺文化財研究所・都道府県の埋蔵文化財センター・博物館等、第一線で活躍されている方々がいる。

その調査成果は『人類誌集報』として随時刊行し、研究機関や調査地の方々に配布してきた。現在も飛騨市域での調査は継続しており、これからもフィールドワークが積み重なっていくと考えている。



図1 民俗誌・実験誌・遺跡誌調査活動の成果として刊行してきた報告書群

1 考古民俗館の収蔵民具の調査

活動拠点となった考古民俗館では、国指定重要民俗文化財に指定された生活用具類が展示・収蔵されていた。展示は、焼畑コーナー・常畑コーナー・春木山コーナー・山仕事コーナー・樽作りコーナー・川漁コーナー・狩猟コーナー・機織りコーナー・祭礼コーナー・運搬具コーナー・豆腐作りコーナーなど、生活用具が仕事ごとに分けた形になっていた。

一方、収蔵は用具単位で収蔵されていた。また、一種類の生活用具が大量に収集されてい

て、集落名・使用者名が分かる札が付けられていた。旧宮川の生活用具収集作業が、各集落に及んでいて、広く声がけて生活用具を収集したことが分かった。

旧宮川村は、宮川の河岸段丘面に作られた集落と、宮川にそそぐ沢をのぼった集落とから構成されていて、その立地が保有する生活用具の種類や使用量に影響を及ぼした。たとえば、同じ雪掻き用具＝バンバ（コスキ）であっても、段丘面の集落で使用されたものと、沢筋をのぼった地点の集落で使用されたものとは、異なっているように見えた。坂道除雪バンバが必要なので、道路除雪用の消耗頻度が高まったためと考えられた。また、合掌作りの家屋と、養蚕のために二階を広げた家屋とでは、屋根の傾斜が異なるために除雪作業が異なる。長さ3mを超えるバンバの収集地は合掌作り家屋が存在する集落から収集されていた。

個人で作るか地元の大工さんに作ってもらうバンバは、柄の長さや筥の形を指定して作られるため、変異が認められた。しかし、バンコ炬燵のような既製品購入品は、採集集落に関係なく形態差が無い生活用具であった。

斧や鋸は、形・厚さ・重さに変異が多く認められた。斧柄は使用者の体格や作業地の地勢などに合わせて用意された部材だが、鉄斧や鋸などは村内の鍛冶屋さんが作るのではなく村外の特殊な工房をもつ生産地で作られたものなのだろう。すると斧や鋸の変異は、目的（機能）別につくり分けられた既製品だと考えられた。

織機については、解体して全部材の記録をおこなった。限られた家屋空間では織機を解体して保管することもあり、部材に組み合う箇所には記号を付けて分解・保管していた。私は、目にした多量の民具が、遺跡出土の遺物を形の違いや発見量を考える重要な鍵を握っているのではないかと考え、生活用具の調査や使用者への取材を行なおうと決めた。

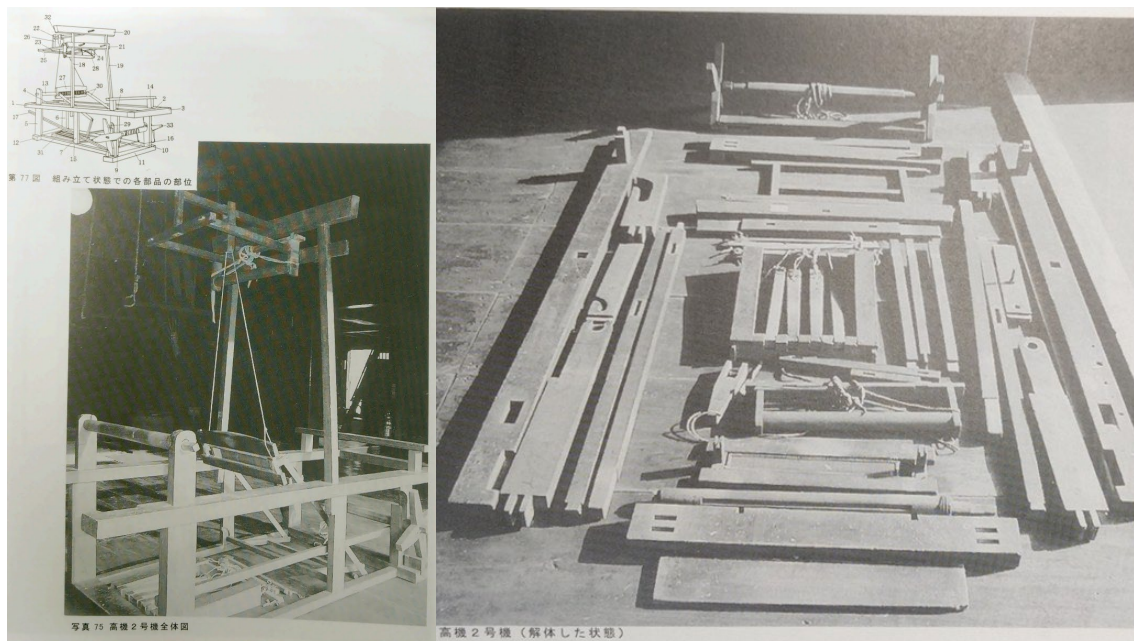


図2 考古民俗館所蔵高機の分解調査

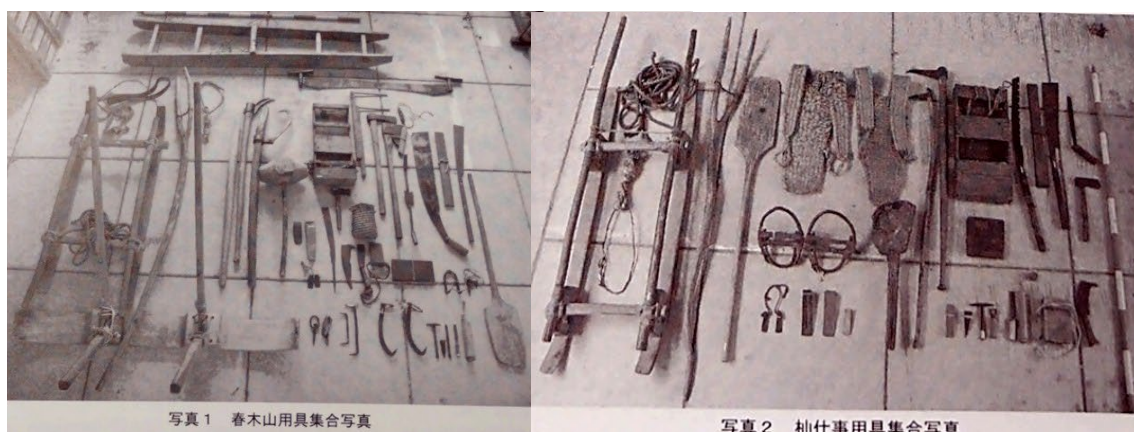


図3 仕事別に組成された生活用具集合写真

2 旧宮川村・旧神岡町・旧河合村・旧古川町の人々のくらしと生活用具の取材

旧宮川村は、江戸時代には宮川を挟んで郡が異なっているし、明治期からは行政村として坂上村と坂下村に分けられていた。その境は段丘面が無い峡谷になっていた。中には宮川の兩岸に自然村が存在している地区があり、川を越えた交流があったことも考えられた。旧宮川村の生活は、自然村毎の家々のくらしではあるが、自然村間の交流も日常的にあった。江戸時代の記録には、旧河合村の山中紙生産のために、宮川村の自然村からも楮を提供した記録がある。また、明治時代の教育や軍充実を図った国策＝地租改正で、屋敷回り以外の各村の領域内の山林の所有が定められたので、山林の利用の仕方も変わったはずである。

種蔵では、村外から入手した物資や村外からの入村者について、聞き取りを行った。富山方面からの「歩荷さん」による衣料や食材の話を教えていただいた。また、焼畑作りの作業・焼畑での作物の変化などをお聞きした。記憶に残っているのは、数年の焼畑生産の後にクリの木を植えて、そのクリの木を住居用材としたことを伺ったことだった。村域での計画的な物資調達構想は、縄文時代の定住期にも構想されていた。私は2001年に建築フォーラムで、縄文里山での「栗林経済」＝世代毎の里山循環利用を発表・論文化していた。

杉原では、昭和に木挽き作業を行っていた方から村外へ出す板材の生産に関わっていた話をうかがった。村外からの流入物資以外に村外への流出物資もあり、昭和期には地産地消を主としながらも、流通経済にも関わった生活を知ることができた。高山の民俗村で板葺き屋根を仕上げた古川町在住の方からは、飛騨のクリ板屋根の歴史を伺うことが出来た。山間の自然村では共有萱場から得る茅を使った屋根の家々があったが、家屋数が多い町場では萱場が確保できないために、板葺き屋根の家々が有ったことをお聞きした。

旧宮川村では富山の稲作農家に馬を貸し出して代替に米を受け取っていたのであったが、家畜馬用の草を得る草場の存在は、すでに十分には聞き取れなかった。飛騨萩原で脇田雅彦氏が製作した集落の草場の距離は、小規模村では1～2 kmであったが大規模村では6～7 km離れた地点からも草を取っていたことが示されていた。

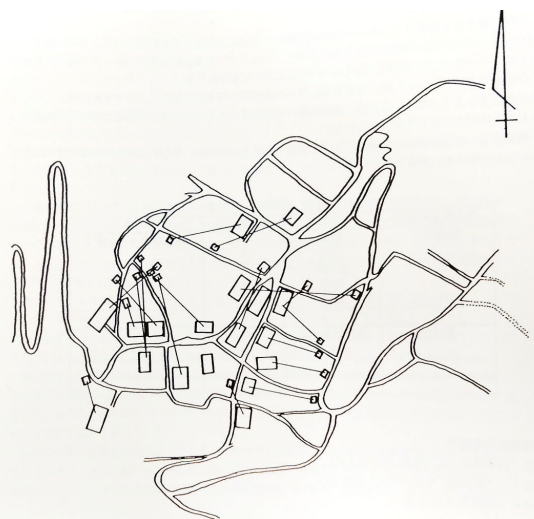
森安では、納屋に収められた生活用具の見学と、使用時の道具選択の話をうかがった。納

屋には斧や鋸が多数保管されていたが、なぜそのような数の道具があるのかをお聞きすることができた。伐採地の地勢や伐採木の種類や太さで選択する斧や鋸は選択され、木割作業で扱う斧は身厚の物を使い、ハツリ作業には刃幅のある斧を使う、という話をお聞きした。民具研究でよく説明されることではあるが、作業者による納屋での道具選びの実際を拝見することが出来た。

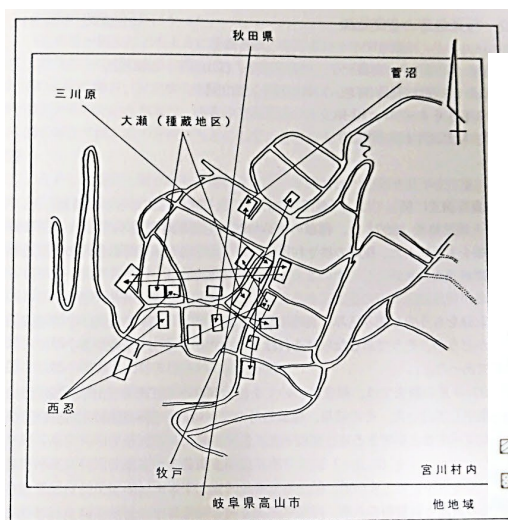
なお、種蔵・洞・祢宜ヶ沢上・西忍では屋敷地の作図を行なったり、洞から考古民俗館に移築された民家の作図作業を行なったりした。町場の神岡町では水道整備や水屋の話をお聞きしたり、河合村では春木山と紙漉き作業を調査させていただいたりもした。また機織りに関しては、実際に作業経験のあるお二人に、経糸づくりから織りにかけての実験を行っていただいた。



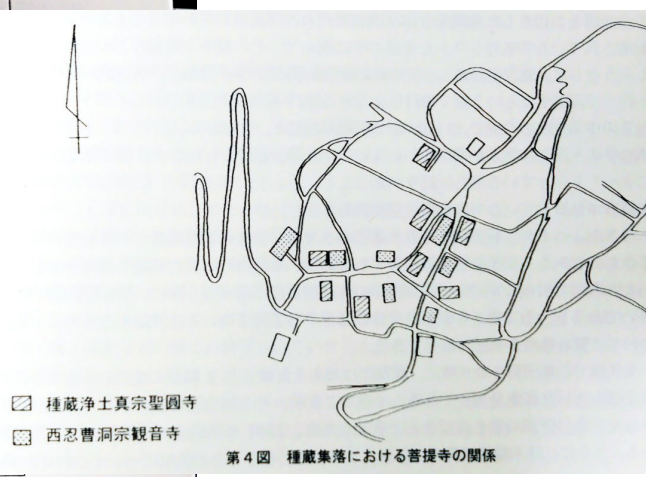
第1図 種蔵の集落図



第2図 種蔵集落における板倉の所有関係



第3図 種蔵集落への出入関係



第4図 種蔵集落における菩提寺の関係

図4 種蔵集落部空間関係の記録

3 実験考古学

実験考古学では、石斧の伐採実験・縄文土器での調理実験（燃料材使用量実験）・クリの実管理実験を行った。石斧では、思ったよりも早く伐採ができ、太さ 15～20 cmのクリの木は、1000 打撃・10 分程度で伐採できた。考古民俗館では縄文土器を復元して煮沸実験を行った。縄文時代には掘りくぼめた炉・石で囲った炉が使用されている。単に地面に土器をおいて熱するよりも、3 分の 2 の薪の量で調理ができることが確かめられ、縄文時代でも里山の木を節約使用したことが分かった。

居住地に 10 の食事集団がいるとすると、1 年間に使用する燃料は 15～20 本の木を燃やす必要があり、それが 10 有るとすると 150～200 本の木を切る必要があった。民俗取材では春木山では一軒で 20 本くらいのコナラの木を切ったことをうかがったが、縄文時代の村もかなりの森林干渉を行っていたことが分かった。これに加えて、住居建設が有るとすると、一棟で 30 本くらいのクリの木を使ったことが判明したので、縄文里山は 20 年ほどの時間で萌芽更新を図る林であったことが分かった。

クリやドングリの実を採取して保管する技術や、実の中にどのくらいのムシ（ゾウムシの仲間や蛾・蜂の仲間）が卵を植えつけているかの実験を行った。小学生に時代に自由研究でカシの実に数個の卵が植えつけられていたことを研究しようとした。ファーブル昆虫にはカシシギゾウムシは一つの実に卵を一つしか産み付けないと書いてあった。ファーブルは間違っていると考えたのだが、父親からその卵がみんなカシシギゾウムシのものかを調べないとダメと諭された。

しかし、大分県竜頭遺跡出土のイチイガシの実にはゾウムシの幼虫が 6 つも残されていた資料があった。60 過ぎに発見した遺物は、10 歳の私の疑問を解決してくれた。そこで、縄文人はせっかく集めたクリやドングリを水につけてムシ殺しをしていることの意味を、考える実験を行った。旧宮川村西忍に沢水を引き込んだ水枡を設置して、集めたクリを漬けて経過観察をした。「低地貯蔵穴」と呼ばれている遺構があり、その中に直接または籠に入れた木の実が発見される。第一ずっと水に漬けていたら実のデンプンが溶けてしまう。だから私は、貯蔵目的と考えるのは間違いで、産み付けられた卵が幼虫になるのを防ぐ作業の施設だとした。実際に 2 か月以上つけると実が溶け出すことが分かった。

それ以上に重要な発見があった。西忍で採取したクリの実は、9 割以上に虫害があることが観察された。ところが、石川県能登町で同時期に行った実験では 1 割弱の虫害しかなかった。自然放置されたクリ林には周囲に虫が多く、実には卵が植えつけられることが多いのに対し、毎年除草やクリ拾いをしている里山のクリ林には虫が少なく、実に卵が植えつけられることが少ないことが分かった。村が継続すると縄文里山のクリも虫が少なくなったと考えるようになった。大分の遺跡のドングリも水の穴に残されていたものなのだが、古い穴のドングリには虫がいるのに、新しい穴のドングリは虫の数が減っていた。

林さんから塩屋のおばあさんから栃の実を発酵してあく抜きする技術があったことを聞いたとの話をもらった。昔のことを思い出して発酵あく抜きをしたら、蚕が死んでしまった

との話だった。考古学者の渡辺誠はあく抜きの研究を行った研究者として有名であるが、実は昭和のあく抜きの取材は、日本に養蚕が展開した後の技術で、そのまま縄文時代に当て嵌めるのは間違いなのではないかと考えた。

同じ発酵あく抜きの技術が残る京都の丹後地方には、もう一つ発酵処理をする技術が残っている。藤の蔓繊維から服を作ることは日本各地で行われていたが、木綿が普及する江戸時代以降、藤布作りは激減した。藤蔓の皮を剥いで鬼皮を除去した韌皮部分を、実は灰汁で煮て柔らかくする技術であった。万葉中にも「海士の藤布」と歌われている布は、現在の日本では、ほとんど使用が認められない。この技術を行うと「こわばった」繊維が柔軟になり、身体にフィットする布になる。縄文時代の鹿児島県の「組織痕土器」にも編布痕・編み目痕交差組み（織り）の布が有ることは有名だが、その繊維は柔軟に変形している。現在各地の遺跡博物館で復元されているカラムシの編布貫頭衣は、ピンと張って平面になっているが、縄文時代の人々はカラムシの繊維も灰汁炊きして柔軟化作業を行っていたのに、現在の遺跡博物館は縄文時代人の知識を正確に復元していないのである。



図5 流水水柵の設置をしてのクリの実管理実験

4 研究面から……飛騨市で調査・実験の継続を始めた学術的背景

新進の考古学者であった？私が、なぜ飛騨の山峡の地で民俗誌を調べたり、実験考古学を

始めだしたりしたのかということ、それは考古学や民俗学の描く過去や現在の人類の描き方に、何か違和感を抱いていたからである。それは、大航海時代の後にヨーロッパ近代が考えた地球上の人類社会の認識＝未開・野蛮・文明といった区分を、時間軸の中でも発展的に描こうとした国ごと地域ごとの歴史が、実は人類の文化や社会の実態を説明できていないのではないか、ということであった。

20 世紀に入って、縄文時代の住居が発見され、縄文人の家族が描かれるようになった。千葉県の大森貝塚では、「竪穴住居址」にそこに住んでいた家族のものと考えられた人骨群が発見された。縄文時代の竪穴住居には5～6人の「家族」が住んでいたという姿が、説明されるようになった。近現代とおなじような「縄文家族像」が生み出された。しかし、現在の古 DNA を使った研究では、竪穴住居内の人骨群には血縁関係が無いことや、大人と子供の合葬された墓の骨にも、血縁関係のないものが有ることが示され始めた。縄文時代人の集団規模、経済単位の研究が始まってきているのが、現在の研究段階である。

定住以前はその場にいる人が集団をつくっていた、「知己社会」である。縄文時代の早期前半以前の9000年前の土器は、九州から東北地方まで単純な同じ文様の土器であった。しかし、村を作り始めたそれ以降の縄文土器は、地域毎に異なる文様を見せ始める。村での暮らしの継続は過去の見知らぬ先人の墓を認識し、未来の子孫のために里山を使いまわしている「系統社会」が生まれ、その村が隣の村と関係をもった「地域社会」が生まれた。考古学者はこの社会形成を説明すべきなのに、つまり日本の土地の中に複数の社会ができ始めた時代として「縄文時代」を分解して社会形成をすべきなのに、「定住型の狩猟採集民」などと文化人類学の定義を借用して、一つの時代一つの文化で納めて「したり顔」をしている。

明治時代、E.S.モースが大森貝塚で縄文土器を発掘した調査報告書には、日本には「縄文土器を使用していた」「先住民族」がいたと記述されている。大森貝塚発見の人骨には、切り傷がありそれは人が人を食べていたからだ、と記述されてもいる。その頃の日本の歴史は、神話をもとに日本民族の起源が考えられていたが、「縄文土器を使用していた人々は、それ以前の【先住民族】なのだ」と考えられていた。そこで、モースの描いた食人の習慣は、日本民族のものではないことになった。当時の日本人は自分たちの歴史とは別のものと理解した。

ところが、第二次世界大戦の敗戦後、神話で描いた歴史のはじまりは遺跡情報をもとに書き直されることになり、「縄文時代」「弥生時代」「古墳時代」が日本史の中に位置づけられることになった。ヨーロッパでもアジアでも、こうした市民国家の歴史を先史時代まで国家史として描く国は、実はほとんど無い。韓国では統一朝鮮時代の前には三国が並列した歴史が描かれているし、中国でも「中華」という概念の形成がいつだったのかの考古学的議論が盛んである。新石器時代の中に「龍」のモチーフをもとめ、そこに「中華」の始まりが有るのではないかとという研究もあるが、一般的には黄河・揚子江流域の青銅器文化に「中華」の考えの始まりを見出している。

つまり、旧石器時代からの知り合い関係で生活する「知己社会」は、縄文時代の前半期の

「竪穴住居」に住んだ数名の「縄文人」を家族とすることを考え直す必要性が考えられるようになった研究報告は、旧宮川村での調査活動を毎年纏めた東京都立大学の報告書、『人類誌集報』として1997年から刊行されている。その最初の冊子に併載されているのは、岩手県の遺跡で明らかになった縄文時代居住地遺跡の竪穴住居址群の分析であるが、そこでは一つの竪穴住居に一家族が住んだとは考えられない建物址群が示されている。居住地周辺の限定された空間で多様な作業を分担して生活するには。現代の核家族のような単位ではなく（縄文時代人の寿命で何人の子供を作っていたかは不明であるが）、30人程度の大家族＝経済単位集団が有ったと考えないと、中緯度帯の中国中心部の農耕を始めた新石器時代と別の、極東アジア小空間で基本的に自立経済を行う人々は、核家族のような規模では、生活を進めることが困難だったと考えられた。飛騨地区の合掌集落のような大家族の形は、縄文時代に生まれていたのかもしれない。合掌家屋を崩した生活に移行しても、生活を維持するためには、村を構成する家々で助け合う「結」の存在があるのは、総出で助け合うことが必要な同村居住者の生き方だったと考えられる。

明治時代の農漁村の居住者にも名字を与え、家族ごとに家を引き継ぐことや村を引き継ぐことは、今その終わりにあり、どのような家族像を描き直すこと、集落を続ける構想も描き直すことに直面している。

「どうしようか」ではなく、「こうしよう」を実行するのは、今なのである。

おわりに

私の飛騨みやがわ考古民俗館を拠点とした活動は、70を超えた今でも続いている。また、日本中に実験フィールドを作って地域生態系毎のデータ蓄積も進んでいる。生涯現役を標榜しているが、30代の仲間の多く、私の価値観とも異なった研究展開が始まったのはうれしい。でも、「ジジイはまだやるぞ」なので、「おわりに」ではなく、「まだまだ終わらないぞ」をまとめの言葉にしておきたい。